

「津軽一統志」の方法

―二つの叙述からみる大浦（津軽）氏の家督継承―

工藤大輔

はじめに

周知のように、「津軽一統志」は、弘前藩五代藩主信寿の代、享保十二年（一七二七）から四年の歳月をかけて編まれた、弘前藩の正史である。^①その編さんの目的は、藩の自己認識を確立する作業であり、その存在の正統性を明らかにし、補強しようとしたものであったという。^②そして、編さんの基本方針は、とにかく藩祖為信の事蹟を詳細に記録することとあり、弘前藩の出発点がいかなる所に求められるのか、ということにあった。^③

さて、このような性格の「津軽一統志」を歴史史料として扱うばあい、当然のことながら編さんの意図をよくよくふまえて読まなくてはならない。しかも、為信に関する記述に関しては、彼を「藩祖」として位置づけるあまり、当時の人々が「こうあるべきだ」と考えた記述がなされることで、逆に歴史的な事実を歪曲してしまう傾向もあるともいわれている。^④このような、いわば、「津軽一統志」に仕掛けられた罠に陥れられずに、この史料を読んでいくということが重要になってくる。^⑤

そうしたなか、近年、「津軽一統志」に関して注目すべき研究が目

つく。たとえば、長谷川成一「一体の像から―大浦光信像と津軽氏―」では、津軽統一事業の出版を担った人物として南部光信を自家の歴史に刻み込む手段の一つに、「津軽一統志」の編さんがあり、ビジュアル効果として光信の像を制作し、さらには光信の廟所を整備し、聖地化したと論じている。つまり、「津軽一統志」の編さんという存在がシンボリックにディンテイを確立する過程のなかで、光信という存在がシンボリックに取り込まれたというのである。また、入間田宣夫「津軽一統志における系譜認識の交錯（覚書）」^⑦は、「津軽一統志」附巻に採録された津軽家の系譜に関する記事を分析し、「津軽一統志」の編者は、四代藩主信政のころから主張されるようになった、近衛家であるとか平泉藤原氏の分かれであるといった津軽家のいわば無理筋とでもいうべき系譜認識を掲げるほかなかった事情が明らかにされた。

さらに、萬谷大輔「津軽一統志」の流布と利用について^⑧と市毛幹幸「民族衝突の記憶―「津軽一統志」巻第一〇収載の寛文蝦夷蜂起関連資料と叙述の継承―」^⑨がある。萬谷氏は、「津軽一統志」の写本の多さに注目し、これは藩士の間で貸し借りが行われ、それが書写されたことによるものとする。^⑩藩政時代の「津軽一統志」の位置づけを考える上で、

注目すべき指摘であろう。

一方、市毛氏によれば、上中下の三つで構成される「津軽一統志」巻一〇（寛文蝦夷蜂起関係記事）は、上の「松前蝦夷蜂起」でもって完結し、それこそが「北狄の押え」という近世国家秩序のなかにおける弘前藩の位置づけを示す本編であり、中下は補足した資料編として配置されたものであったと論じる。「津軽一統志」の編さんの方針には、すでにこの事件について記録を留めることが企図されており、この点に着目したことは、「津軽一統志」の史料学的研究において大きな意味をもつものといえよう。

小稿は、これらのすぐれた研究に触発され、「津軽一統志」をいかに読むかということの一つの試みである。弘前藩、ひいては津軽家の存在の正統性を説くことを目的とする「津軽一統志」において、その家督の継承については細心の注意が払われているはずである。とくに、為信の跡目を巡っては、為信の三男信枚と長男信建の嫡子大熊が争い、幕府の裁定によって決着が図られている。また、藩祖為信が大浦為則の跡目を相続することは（為信は為則の実子ではなく弟の子とされている）、「津軽一統志」の叙述のなかで最も重要なエピソードの一つとして記録されるべきものと思われる。

したがって、これら二つの事象については、直接・間接さまざまな形で「津軽一統志」のなかに織り込まれながら、その正統性を主張しているものと考えられる。そこで、小稿では、前者については、重臣である尾崎喜蔵たちが慶長五年（一六〇〇）に引き起こした謀反事件、後者については、永禄十二年（一五六九）に為信が最初に行った軍勢催促であ

り、「野崎村焼き払い事件」としても知られるエピソード、この二つの叙述を「家督の継承」という視点から読んでみることにしたい。そして、これらの叙述の中に埋め込まれた、編者の意図を探ることで、歴史的実の一端に迫ってみようとするものである。

なお、小稿で典拠とする「津軽一統志」は、弘前市立弘前図書館の八木橋文庫に架蔵される（全六冊、請求番号YK 210-9-1-6）、明和三年（一七六六）の奥書を持つ写本を用いた。

一 野崎村焼き払い事件

元龜年間（一五七〇―七二）ころの三戸南部家では、晴政の家督をめぐって家中が分裂し、混乱が続いていた。こうした混乱の狭をつくつかのようになり、元龜二年（一五七二）五月、大浦為信は三戸南部氏に反旗を翻し、津軽支配の本拠地とでもいべき石川城を攻めた。ここに、為信は三戸南部氏から離反し、津軽独立を目指すことになった。

さて、為信の家臣団は、表（14・15ページ参照）にあげたように、小笠原信清・森岡信元・兼平綱則といった先代為則以来の譜代の家臣団のみならず、安藤・南部両氏の侵攻によって浪人となったと思われる隣国の鹿角などの領主層や、北陸や畿内近国から移住してきた武士によって構成されているようである¹⁾。また、おなじく表からは、津軽統一戦において功をあげた者が多いということも特徴的にみて取ることができる。

さらに、文禄二年（一五九二）に取り立てられた嶋村近江守や、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原への参陣（美濃国大垣城攻め）をきっかけに

取り立てられた、東海吉兵衛や服部長門守といった面々も目につく。東海吉兵衛は、二代藩主信枚にも任せ、弘前築城に際しては縄張奉行として信枚を支えた。¹²そして、服部長門守は、為信・信枚・信吉の三代に家老として仕えた人物である。¹³そして、二代藩主信枚のもとで進められた、青森開港後の町づくりにおいて、乾四郎兵衛・白鳥瀬兵衛とともに、その責任者の一人として腕をふるった人物としても知られている。¹⁴このほかにも、後に述べるように、天正十九年（一五九一）の九戸一揆の後に取り立てられた松野信安は、若くして為信の側近となり、小笠原信清ら「三老」とともに為信の今わの際にも立ち会っている。¹⁵このように、為信は津軽独立後、後に重臣として活躍する家臣たちをも積極的に登用しているという姿をうかがうこともできる。

ここで、為信の家臣団に関する叙述として注目したいのは、「津軽一統志」巻第二「野崎村御計火之事」のそれである。このエピソードを一言でいってしまうと、為信が野崎村に軍勢を進め、村を焼き払ってしまうというものである。この叙述自体は、為信による最初の軍勢催促のシーンとして、「津軽一統志」よりも前に編まれた為信の一代記「愚耳旧聴記」（添田儀左衛門編、延宝二年（一六七四））にも記録されている。ただし、「愚耳旧聴記」には、ここで新たに為信に従うことになった者たちに関わる記事はみられず、これは「津軽一統志」の編さんの段階で書き加えられたものと考えられる。その意味でも、この叙述を少し注意深く読んでみる必要があるのではないだろうか。

さて、「津軽一統志」の叙述によると、為信が三戸南部氏から離反する元龜二年から遡ること二年、また、大浦の家督を継承してから二年ほ

ど経った永禄十二年（一五六九）、為信は鷹狩という名目で軍勢を野崎村の西、岩木山の下野に進めた。当時、為信に従う軍勢は一〇〇〇余で、これはどうも期待していたよりは少なかつたようである。しかし、為信は「此勢にて何方へ働き不義の者をたゞさんとも事足れり」とさほど意に介すこともなく準備を進めたのである。一方、「愚耳旧聴記」では、軍勢が思いの外集まっていなかったことを目の当たりにした為信は「思いしよりハ不足なり」といったとする。いずれにせよ、この段階では、大浦家中のなかに為信に従わない者が少なからずいたことが想定できるのである。

一方、この軍団には一揆の主領である新岡・篠森・独狐・三世寺・町田・折笠・宮館・桜庭なども加わることになった（この記述は「愚耳旧聴記」にはない）。これらの一揆勢は、岩木山と岩木川とに挟まれた地域で、かつ桜庭以外は大浦城の北側を拠点とした勢力であると思われる。そして、戦国末期において為信の譜代家臣の城館分布がほぼこれに一致するところから、彼らはこの後、大浦氏の譜代の家臣となっていくものと考えられる。¹⁷

これらの軍勢を、「津軽一統志」では後に三老と呼ぶ、為信の側近小笠原信清・森岡信元・兼平綱則のもとに編成し、大浦城から直線距離にして約一・四キロメートルほど離れた野崎村へと進めたのである。もともと、野崎村の民衆に対しては事前にアナウンスされており、家財などは「森林」（村の西方にある愛宕山のことか）に運び出し、当日村はもぬけの殻になっており、そこに火が放たれたのであった。その後は、惣軍に酒が振る舞われ、静かに大浦へ帰城したと伝えられる。

さて、一種の軍事パレードともいえるような、為信のこの行動をいかにとらえるべきか、つぎに考えてみることにしよう。手掛かりは、為信による大浦の家督相続に関する叙述にあるのではないだろうか。「津軽一統志」によれば、為信は、大浦城主為則の弟守信（武田甚三郎とも、「津軽一統志」では専ら武田甚三郎と表記するので、以下の叙述においては、それに従うことにする）の子で、為則の娘婿となりその家督を相続するのである。その過程は、まず南部桜庭の戦いで、為信の実父武田甚三郎が戦死する。その後、病に冒されていた為則が甚三郎の子である扇（後の為信）を為則の「一女」に娶せて、家督を相続させることにした。そして、永禄十年三月十三日に祝言を挙げ、病にあった為則はそれから一か月後に亡くなったと伝えられる。

為信が娶ったという為則の「一女」とは誰か。「津軽一統志」で「一女」の事例は、これを含めて三例あり、ほかの二例はいずれも「長女」を意味しているので、ここでも、長女と解釈するのが妥当であろう。しかし、為則の「一女」は「横内城主堤孫六室」であって、彼女ではない。為信は為則の「二女」と娶られている。では、「一女」という表記は単なる誤記なのか、「津軽一統志」の叙述において何か意図があつてなされたものなのか。「津軽一統志」より五〇年ほど前に編さんされ、「津軽一統志」叙述も少なからず影響を受けている「東日流記」では、堤孫六を為則の「下腹の御婿」（「下腹」の意味は不明）と記しており、これが関わるのかもしれないが、目下不明である。

この堤孫六という人物は、為信の実父武田甚三郎とともに南部桜庭の戦いに副将として出陣し、そこで戦死している。²⁰そして、孫六が亡くな

った当時、彼には三歳になる子どもがいた。²¹ その子どもは堤弾正左衛門といい、「津軽一統志」では二〇代を半ばも過ぎた弾正左衛門に対して、「其質極めて痴にして一向武義に欠たる者なりし」と酷評し、そのため為信と対面することができず、弾正左衛門自身はこれを恨んでいたという。²²

孫六・弾正左衛門父子は、「津軽郡代」として三戸南部氏が堤ヶ浦に派遣した一族南部田子光康（康時とも、信時末子で堤ヶ浦入部してから堤を氏の名とする）と繋がりがある人物であると思われる。そして、堤氏は光康の孫の代になると、大浦城とともに津軽支配の一翼を担った大光寺城に移って、大光寺を名乗ったとも伝えられる。²³ その意味では、大浦氏が堤氏と縁戚関係を持つことはとくに不思議なことではあるまい（「下腹」の問題はここでは留保）。しかも、堤氏の一族であれば、仮に大浦の家督を相続するにしても、不足はなかったのではないか。ただ、孫六・弾正左衛門父子については、南部側の系譜や記録には見えないといい、天文年間（一五三二―五五）以降の堤氏の南部家中での立場も明確でないともいう。²⁴ さらに、為則には第三子には長男藤崎五郎、第四子には藤崎六郎がいた。彼らもまた大浦の家督を相続すべき候補者たちであつたか。こうしたことからみると、為則の後継者はどうやら為信が唯一無二の存在ではなかったのではないかと思えてくる。

にもかかわらず、「津軽一統志」の叙述は、武田甚三郎の死をきっかけとして、為信の家督相続に向けて急展開する。そして、為則自身も、為信と娘の祝言の一か月後に死亡するとされる。²⁵ 武田甚三郎の死は何を意味するのか。

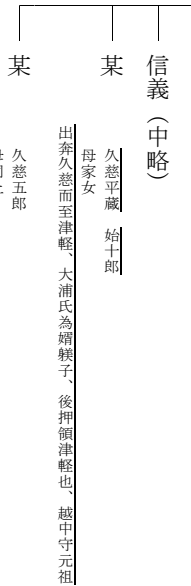
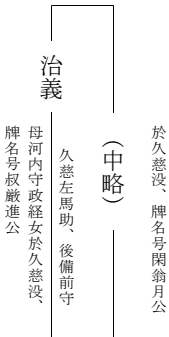
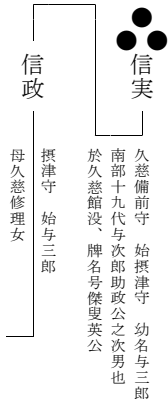
また、そもそも、為信の出自についても、はっきりしない部分が多い。「東日流記」には

為信公御実父様武田紀伊守守信公御出陳(座)之砌、堀越に住居仕候(飛鳥)「」某といふ者守信公御母方の御従弟にて、其頃平賀郡大仏

鼻に居城仕候石川殿従者にて御座候、右飛鳥某に被仰付候者、我等此度出陳大概討死と覚悟申也、然者子供式人有之候、五歳に成候俵扇子事者そなたへ頼む也、ものにも成ぬへき生つきならハ、名立て其方跡をも継せ可被申、左もなくハ、兎も角もそなたに任せ候と御頼被遊候(28)、

という記述がみえ、これによれば、為信は幼名を扇といい、実父甚三郎が南部桜庭の戦いに出るときに、母方の従兄弟で石川高信の従者の飛鳥某という人物に預けられた。しかも、甚三郎に万一のことがあったばあい、この飛鳥某という者の跡を継がせてもいいとするなど、甚三郎はおよそ為則の家督を継承させようなどというそぶりもみせない。そして、叙述としては、むしろ、為則側から積極的に娘婿として迎え入れようと動くのであった。

一方、南部側の系譜・記録によれば、為信は久慈備前守(治義)の子で、平蔵もしくは弥四郎と名乗っている。このうち、平蔵を名乗る方の史料をあげると、



(以下、略) (傍線は引用者による)

というように、第五郎とともに久慈を出奔し津軽に至り、大浦氏の娘婿となつて津軽を統領するという。この「平蔵」という名乗りは注目すべきであろう。というのは、為信の家督を相続した信枚、そして信義・信政・信寿の四人の藩主はいずれも「平蔵」を名乗っているからである(28)。南部側が伝えるこの名乗りの問題は無視できまい。

さらに、実父武田甚三郎に関しては、為信は天正十九年の九戸一揆の後、一揆に与したことで討たれた武田九郎左衛門尉の息子(後の松野信安)を取り立てる。為信と九郎左衛門尉は長年にわたる深いつきあひがあり、それがために息子を取り立てたのである。そして、彼はすぐに為信の側近の一人となっているようなのである。武田甚三郎の名乗る武田姓は、この武田九郎左衛門尉の一族を意味してはいないか。また、右の史料との整合性をみるならば、武田甚三郎との関係も、実父ではなく、

久慈出奔後、津軽における為信の後見人的存在であった可能性もあろうか。

つまり、平蔵の名乗りといい、武田甚三郎との関係といい、為信という存在が大浦の系譜からどんどんと離れていくのである。逆にいうと、為信（と彼を擁立しようとする者たち）にとつて、恐らくは後ろ盾となる甚三郎が死んでしまったため、一気にことを進めなければ、為信が大浦の家督を継承することができなくなるような事態が生じていたのではないか。そうしたなかで、堤孫六の死は為信にとつてはプラスに作用したであろう。しかし、為則の二人の息子はそうはいかない。「東日流記」が病床の為則が「子供ハ未幼少ニ候得ハ、近辺の侍共輕しめ可申候、³⁹」と述べたとするのは、こうした事情を物語っているのではないだろうか。「津軽一統志」が為信の家督継承の叙述を急ぐのは、まさにこうした事情を象徴しているのであった。単に、為則が死を目前にした病にあったからではあるまい。そこには、為信による家督継承をめぐる、大浦家中が大きく動揺していたことを暗示しているかのように映るのである。

そして、このときに為則執事として為信の家督相続のために動くのが、さきに紹介した小笠原・兼平・森岡の三人である。このうち、兼平は延徳三年（一四九一）に津軽の地にやってきた南部光信（後の大浦氏）の二男「兼平伊豆守」⁴⁰の家柄である。森岡は、光信の子盛信の二男「盛岡祖山城守為治」⁴¹の一族であろうか。この二人はいずれも大浦嫡流に近い人物であったとみられる。そして、「津軽一統志」でこの三者が併記されるときに最初に書かれることが多い小笠原であるが、彼は為則によつ

て取り立てられ、姓を「木庭袋」⁴²とも「葛西」⁴³ともいったという。彼は、鎌倉期に奥州惣奉行として平泉に派遣された葛西氏の後裔で、のちに津軽へ移住し西津軽郡一帯に勢力を有し、深浦円覚寺の永正二年（一五〇五）と翌三年の棟札にその名がみえる葛西頼清に繋がる人物ではなかったか。⁴⁴そして、小笠原のような来住者が、在来の住人・土豪層などと縁を切り結ぶような役割、為信の家臣団にみられる一揆勢（たとえば、さきに示した岩木川周辺の勢力）や地侍層を鳩合していくのに力を発揮していたのではないか。もつといえは、為信の家督継承、それ自体にも彼が果たした役割が大きかったのではあるまいか。

さらに、後のことではあるが、天正十三年（一五八五）六月、為則の子藤崎五郎とその弟六郎は、為信の手によつて殺害されている。⁴⁵この行為も、自らの家督をめぐる家中の火種を消すためのものであったか。このように考えると、為信による大浦の家督相続は、どうやらすんなりと進んだものではなく、ある意味では後々にまでしこりを残すような、かなり「きな臭い」ものであったように思われるのである。

したがって、永禄十二年の鷹狩にこと寄せたこの軍勢催促は、自らが大浦の家督継承者であることを内外にアピールするために行った、一種のプロパガンダであったと考えられるのである。為信にまだまだ臣従できない者はこれに参加しなかったであろうし、一方では一揆衆を取り立てることなどをしながら、為信は自らに従う者を見極め、新たな家臣団を創出したのであった。かつて源頼朝が、富士の裾野で半月余りにわたつて巻狩を行ったことがある（富士の巻狩）。これは、征夷大將軍に補任された頼朝が、名実ともに武士の棟梁であることをアピールする一大イ

ベントであったという。為信の軍勢催促も、これとよく似た文脈で理解することができるのではないか。つまり、これこそが、為信による大浦の家督相続の総仕上げというべき、盛大なデモンストレーションであったのである。

二 関ヶ原参陣直前の謀反事件

為信の関ヶ原の出陣（美濃国大垣城攻め）の直前に、津軽領内で謀叛が勃発した。「津軽一統志」の叙述によれば、為信は駿府で家康に謁見し、そこで関ヶ原への出陣を命じられたという。為信は自らの軍勢を増強するため、国元の尾崎喜蔵・板垣兵部・多田玄蕃、そして松野信安の四人に参陣を命じた。四人は早速軍勢を率いて堀越から深浦へと向かった。ところが、尾崎・板垣・多田の三人はなかなか深浦を出立しようとしなかった。松野は何度も催促したが、尾崎らには聞き入れられず、ついに松野は自身の兵でもって深浦を出帆し駿河へと向かい、為信と合流した。⁽³⁸⁾これに対して、尾崎喜蔵・板垣兵部・多田玄蕃の三人もようやく深浦を発つこととなるが、彼らは為信の待つ駿府ではなく、こともあるうか堀越へ引き返したのであった。そして、堀越城の御城留守居の三人を討ち取ってしまったのである。これにより、堀越城は落城するのであった。⁽³⁹⁾謀反におよんだ三人のうち、尾崎は「御家門」と呼ばれる重臣で、ほかの二人も「大身」のお歴々である。⁽⁴⁰⁾彼らの謀叛の動機について、「津軽一統志」は、

○亦或説曰、尾崎・板垣・三目内か謀逆の意趣を尋るに、今度関

東より加勢之儀申来るに付、此時御城番田村六左衛門・浪岡主馬・土岐新助三人より早速出勢の義、尾崎・板垣・三目内・松野か本へ催促す、是に依て軍資の料を三人の城番へ乞訴へしに、此料用不足に沙汰しけるにより、尾崎・板垣・三目内大きに怒り、終に三人の城番を討とり、やむ事を得ずして取籠り、終に逆心の謀に伏する由を記す、

按するに、此説差謬あらん歟、なんそ軍資の多少を以此一大事をあやまちなや、其頃上方石田か謀叛おもてハ秀頼卿の命と称しうらハ一己の逆意を企て、天下の諸侯を語らひ、関東をなみし奉らんと謀る、誠に天下の大事にして、五畿七道におみて諸侯も其勝敗を疑ひ心決せず、故に諸国に石田に組する者其数をしらす、尾崎・板垣・三目内か徒、又石田に内応の志しあらん歟、又天下擾乱の時に乗して私の謀叛を企て、三郡を押領せんとはかる者ならん歟、二件了、竟ス、

と、二つの説をあげている。⁽⁴¹⁾このうち、石田三成に内応し天下の混乱に乗じて津軽を乗っ取ってしまったおうと企んでいたのではないかとする評については、石田三成が敗れたという報に接した尾崎らは「板垣・三目内・尾崎等大きに仰天し、案の外にそ成にける、」と関わりを示唆するものの、詳細は分からない。ただ、この段階において津軽領内における為信の権力基盤が、「領内の者共か異心はかりかたき」というように、決して盤石なものではない状況にあったとはいえないようか。

また、動機として一つ考えられるのが、慶長二年に為信が浅瀬石城の千徳大和守を討ったということがあげられる。⁽⁴²⁾尾崎喜蔵は、千徳大和守

らとともにかつては大光寺城主の幕下であったが、千徳大和守の嫡子安芸が小笠原伊勢の娘を娶ったことを契機として為信の側についたと伝えられる。そして、これは「津軽一統志」の叙述には出てこないが、「封内事実秘苑」(弘前藩土工藤行一編、文政二年(一八一九)自序)には「板垣・尾崎・三ツ目内杯も汗石大和同志之趣明白二候へ共、大和滅亡の上ハ其外氣遣無之逆其儘被打捨置候」とあり、尾崎たち三人は千徳大和守の「同志」であったという叙述がある。しかも、ここでは千徳大和守を討つことによつて、為信は目矢沢・国吉・相馬・五所・湯口・独狐・宮館などの小館を残らず家臣とし、「御郡中一円平均ニ相成候」とする。大浦城周辺のこれら小館の臣従化が慶長期まで下るかどうかはともかく、尾崎らの謀反は、浅瀬石城が為信によつて攻略されたことが、何らかの影を落としているように思われる。

一方、為信に合流した松野は、為信から信杖を預かることになり、大垣の戦場への参陣が回避されることになる。

一、斯て太守為信公弑千の御人数にて濃州へ御出陣ましくけるか、松野久七信安をひそかに御陳宮へ召して仰せけるハ、今度の一戦頗る天下の御大事也、領内の者共ハ異心はかりかたきによつて、一子平蔵信杖十三歳、于レ考文正十四丙戌年御誕生、十五歳ノ御時カをハ是まで具せられし、案のことく尾崎等三人ハ異心是あると覚へたり、されハ我神君へふかく盟約是あれハ、此度の御合戦、若関東御負たらハ、一定討死と思ひ定めし也、幼子信杖をは汝に預け下さるゝの間、一先何方へも具し時の至るを待て、譜代の者共と申合せ、国家の長久を計るへし、借々世上の有様を考るに、三成たとひ暫く天下の権をとるといふ

共、滅亡遠かるまし、是によつて戦場へは召連ましきそ、是より何方へも立忍ふへし、是こそ死に勝れる忠節ならめと呉々仰示されけれハ、信安辞す口事を得すして貴命に随ひ奉る、是に依て大垣の供奉にはなかりける、

この措置は、為信に万が一のことがあつたばあい、信杖を伴つて「一先何方へも具し時の至るを待て、譜代の者共と申合せ、国家の長久を計るへし」というものであり、尾崎たちの「異心」すなわち、謀反をも暗示するものであつた。そして、何よりも、この段階において、為信の跡目を継承するのは信杖であるということが、あたかも既定路線であるかのような叙述となつているのは注目すべきである。

さて、松野信安とは、

堀長江の城主武田九郎左衛門尉建安後孫松野家の由緒を見るに、武田九郎左衛門尉ハ大守為信公年頃御芳志浅からず、折にふれ御馬・鷹等を賜り、毎事御いつくしみ厚かりしかハ、自然の事もあらんずる時、一子武田新四郎を当家に仕官させん事を多年の望み成しによりて、九戸没落の後天下の檢使浅野長政を始め四将へ達て其旨御願ひありしかハ、宥助ありて十六歳の時当家へ御引取、万事御いつくしみ深く、姓を松野と改め御名の字を賜り、松野久七信安と号し、勲功尤諸人に勝れ、未壯年の頃より老中職に列する、高麗御陣の節功名有り、片桐市正勝元感状賜る、大守此旨執達二付、則阿部伊代守を以て家康公へ御目見、其後濃州関ヶ原の御陣にも御供に候しける砌、武勇を顕わし大御所の御見参にも入り、御手自狸々緋の御具足・羽織を頂戴し、君主為信公よりも御着長を下し賜りける由、其

外巨細の義を伝ふ、惜哉、其子孫故ありて勘気を蒙り家督断施に及ぶ、

とあつて、さきにも述べたように天正十九年の九戸一揆の後に登用された新参家臣である。彼の父親は武田九郎左衛門尉といい、堀長江という城の城主で、九戸一揆では九戸政実に与し、鎮圧軍によつて討たれている。為信とは「年頃御芳志浅からず」という関係で、これが彼の登用の背景となつている。前に述べたように、為信の実父という武田甚左衛門と関わりのある一族ではないかと思われてくるが、詳細についてはまったく分からない。ともかく、信安は壮年のころから老中の席に列せらるることになる。そして、為信の今わの際において、小笠原ら側近の老臣とともにその場にいることを認められるように、為信の側近一人として仕えるのであつた。

さて、尾崎らの謀叛を鎮圧するのに指導的立場であつたのは、金小三郎という人物である。小三郎の父は、小笠原・兼平・盛岡の三老につぐ地位にあつた金勘解由である。⁽⁵¹⁾小三郎は当時まだ十八歳といいながらも、思慮深い人物であると評価されている。⁽⁵²⁾たとえば、尾崎は檜山や大館・安仁あたりの盗賊らに語らつて、三〇〇人ほどを各地に放つて乱暴・狼藉を働かせており、大光寺城にも乱入するような気配があつた。そこで、機転を利かせた小三郎は、兼平出雲信秋を大光寺の守備に派遣し先手を打つた。⁽⁵³⁾また、兼平出雲とは、三老の一人兼平綱則の息子で、後に兼平の家督を継承した人物である（寛永二年（一六二五）に病没）。⁽⁵⁴⁾このように、「津軽一統志」では、松野や金、さらには兼平出雲といつた、若い世代（為信の譜代家臣ということでは、第二世代とでもいふべきか）

ここでいう「新参家臣」とはおおよそこの意味で使っている）が、この謀反事件で重要な役割を果たすよう描いているのである。

これは何を意味するのか。推測をたくましくすれば、当時の大浦の家臣団内部では、世代交代の波が表面化していたのではあるまいか。それが、結果として、領内での為信の権力基盤を心許ないものにしていたのであろう。少なくとも、「津軽一統志」は、老臣と新参・若年の家臣とが対決し、後者に軍配が上がつたという構図でこの事件を記述しているのである。また、「津軽一統志」の歴史叙述という点からは、松野信安に信杖を預けるという記述を挿入することで、為信から信杖への家督の継承ということへの布石がこの事件の中に打たれたものとみられる。もちろん、新参・若年家臣の登用についても、この文脈でみることもできよう。

さらに、家督の継承という点からみたととき、為信の長男信建に、嫡子大熊がこの年の九月六日に誕生したということが注目される。⁽⁵⁵⁾一方、為信の関ヶ原参陣を促す徳川秀忠の書状の日付は八月十九日である。⁽⁵⁶⁾尾崎らの謀反がいつ起きたのかは明らかではないが、この御内書の日付以降であることだけは間違いなく、大熊誕生の直前もしくは直後に起きた事件であつたということができる。したがつて、少なくとも、信杖による家督の継承ということに布石を打つた「津軽一統志」の叙述のあり方は、後に跡目をめぐつて訴訟事件になる大熊の誕生を、相当意識したものであつたと考えられるのである。もちろん、尾崎らの謀反という形の実力行使との因果関係は分からないし、「津軽一統志」も大熊の誕生については一切口をつぐんでいる。

関ヶ原以降、とくに慶長七年以降についていうと、信建は為信・信枚とは異なり国元に滞在するようになる。それは、信建が内政面での責任者として領内の支配にあたったものと考えられ、信建自身も慶長九年までには為信の後継者としての自覚をもつようになっていたようである⁽⁶⁷⁾。それを考えると、もし信建が慶長十二年に病死していなかったとするならば、信枚への家督継承はそうスムーズに運ぶものであったとは思われない。つまり、ここでの「津軽一統志」の歴史叙述のあり方は、大熊の誕生というのが強く意識されたうえで、信枚が家督を継承するという「信枚正統」の論理と、それに伴う家臣団の世代交代といったものを最初に打ち出した叙述であったとみていいのではないか。

むすびにかえて

ここまで述べてきたことを整理すると、まず第一に、為信の大浦為則の跡目相続は、決してスムーズに進んだものではなく、大浦家中が分裂したなかで行われたものであったようである。このことは、為信自身の出自に関わって、為信が大浦氏にとつていわば「よそ者」的存在であったということが背景にあったのではないか。

その中で、為則の執事の一人で、かつ為信の側近ともなる小笠原信清の存在は注目される。小笠原は、為信家臣の「いの一歩」としてあげられる人物である。為信は、一揆衆や野武士集団、さらには盗賊・博奕打ちなどを味方につけて戦を有利に展開するが、ここに小笠原のような移住の浪人衆に由緒を持つような在地の勢力が力を発揮したのではあるま

いか。なんとすれば、そもそも為信の跡目擁立についても、彼らの手腕によるところが大きかったのではないだろうか。しかも、小笠原と同族と思われる葛西頼清は、天文二年（一五五三）に南部氏による津軽支配に対して反旗を翻した際⁽⁶⁸⁾の中心勢力と伝えられる。小笠原が為信擁立に動いたのは、この線から読むことはできないか。いずれにせよ、為信は為則の跡目を継承した後、「野崎村の焼き払い事件」ともいわれる軍勢催促によって、大浦家臣をふるいにかけて、自らの家臣団創出することになった（逆にいうと、そうぜざるを得なかったのではないか）。そして、こうした家臣団を率いて津軽独立を目指し、天正十八年の豊臣政権の奥羽仕置において、奥羽地方では唯一の例外とでもいうべき、新たな大名として津軽領の支配を認められたのであった⁽⁶⁹⁾。

つぎに、関ヶ原出陣直前に起きた謀反事件の叙述に関しては、首謀者尾崎喜蔵らの「異心」を察した為信が、信枚を新たに側近として登用した松野信安に預けることで、自らの後継者としたとするような叙述がなされている。これは、この年に誕生した信建の子大熊を強く意識した上での叙述であったと思われる。「津軽一統志」にかぎらず、いわゆる「弘前藩史」では、信建関係の叙述が意識的に排除されている感がある。これは、信枚の系統がこの後の津軽氏の本流となったことに求められ、「弘前藩史」の歴史叙述のなかには、これを正統とする仕掛けが叙述のなかに織り込まれることになる。この叙述は、まさにそうした仕掛けの一つであるとみていいであろう。信建関係の史料がほとんど残っていないので、当時の状況はよく分からないものの、信建自身は為信の後継者としての自意識をもっていたことは間違いあるまい。そして、松野信

安や後に青森開港の際に尽力した森山弥七郎のほか、父親が為信の重臣である今小三郎、兼平出雲といった若い世代の者たちが、為信 信枚という津軽氏の譜代家臣ということで登場し、「信枚正統」をさらに印象づけるのであった。

このように、為則―為信―信枚へという家督の継承に関して、「津軽一統志」の叙述、とくに為信が死去する巻第七あたりまでを読んでいくと、当然のことながら幾重にも塗られた潤色の跡がみられる。それを、どのようにして一枚づつはがしていくかということが、「津軽一統志」の読みに求められるのではなからうか。

註

- (1) 「津軽一統志」の編さんに関しては、『新編弘前市史』通史編2（近世1）（弘前市企画部企画課、二〇〇二年、三六五―三六七ページ）に詳述されている。
- (2) 長谷川成一「津軽氏」（『地方別日本の名族』一東北編1、新人物往来社、一九八九年）。
- (3) 長谷川成一「近世奥羽大名家の自己認識―北奥と南奥との比較から―」（同『北奥羽の大名と民衆』、清文堂、二〇〇八年）。
- (4) 長谷川成一「津軽為信論―津軽為信と全国政権―」（弘前市教育委員会編『弘前の文化財 津軽藩初期文書集成』、弘前市教育委員会、一九八八年）。
- (5) ただ、一方でそれを意識しすぎると、極端な史料解釈が生じてしまう可能性もある。津軽為信を論じた成田末五郎氏の『津軽為信』（東奥日報社、一九七五年）は、その冒頭で「それらの史記（「伝説的」）記述が

みられる記録史料（引用者注）から落穂をよりすぐって拾うようにして、話をすすめるしか仕様がなない。もちろん、人それぞれの見方がありますから、当然異見もあるでしょう。」と述べている。

成田氏の為信論は、「津軽一統志」のような編さん物史料を丹念に読み込み、さらには四〇年もの長きにわたるご自身の研究に裏打ちされたもので、学ぶべき点が多い。しかしながら、そこから三五年が過ぎた現段階においては、落穂の「よりすぐり」方の客観性、しかもその解釈が極力「異見」のない、合理的な解釈となるべきことが求められるものと考ええる。

- (6) 北原かな子・郭南燕編『津軽の歴史と文化を知る』（岩田書院、二〇〇四年）。
- (7) 『歴史遺産研究』No.4、二〇〇八年。
- (8) 『弘前大学国史研究』第二二五号、二〇〇八年。
- (9) 『弘前大学国史研究』第二二六号、二〇〇九年。
- (10) 葛谷氏はこのほかに、「津軽一統志」が藩士によって書写され流布することは、藩当局の意図するところであったとするが、その「藩側の意図」が何であったのかを明らかにしていないように思う。また、藩士の家記や由緒のなかに「津軽一統志」が反映されることで、津軽家の自己認識が「藩意識化」されていくと説くが、この「藩意識」とはどう定義づけられるものなのか、さらには、これも藩当局が意図するところだったのか、そのあたりのところが十分に詰められていないのではないかと思う。
- (11) 『新編弘前市史』通史編1（古代・中世）（弘前市企画部企画課、二〇〇三年、四五三―四五四ページ）。
- (12) 『三百藩家臣名辞典』第一巻（新人物往来社、一九八七年）。
- (13) 同右。

(14) 『新青森市史』資料編4近世2(青森市、二〇〇四年、一・四号文書)。

(15) 「津軽一統志」巻第七「大守為信公就」御病悩上京并御影像彫刻并信建公於「京師」卒去為信公逝去」

(16) 弘前市立弘前図書館蔵岩見文庫「津軽創業記」。

寛政三年(一七九一)に今通磨によって編まれた「津軽古事伝記」(弘前市立弘前図書館蔵古図書保存会文庫)によれば、「愚耳旧聴記」は一名を「勇者記」ともいい、上中下の三巻でもって構成されているとある。また、『弘前図書館蔵郷土史文献解題』(弘前市立弘前図書館編・発行、一九七〇)では、「愚耳旧聴記」は歴史書というよりは、軍記物語あるいは読本として広く流布していたとあり、「勇者記事」「津軽創業記」「故籍見聴記」「津軽合戦記」「津軽日記」など、多くの異名で書写され流布していたという。「津軽一統志」とおなじく、藩士の間で広く書写されたではないかと思われる。とくに、写本のなかには文字が稚拙なものもあり、手習いのテキストとして、子弟教育にも使われたのではないかという印象さえ受ける。

試みに、弘前市立弘前図書館の目録から、「愚耳旧聴記」とおなじ内容を持つものをひろってみると、「津軽古事伝記」にみられる「勇者記」という書名のものはなく、三巻本であったことをうかがわせる写本もあるが、現存するものとしては二巻本が多い。そして、基本構成も一巻目は為信の誕生から浪岡城の落城と、それに続く北畠左近に関する記述まで、二巻目は油川城の落城からはじまり、為信の死去で終わっている。また、「愚耳旧聴記」以外の名称としては、「津軽記」と「津陽開記」の二つが多いようである。

なお、小稿で引用した「津軽創業記」は、こうした書写本の一つで、宝永元年(一七〇四)十二月二十一日に書写されたことが記されている。

これは、現在弘前市立弘前図書館に架蔵されている諸写本のうち、書写年代が明記されているものなかではもっとも古い写本である。

(17) 長谷川成一「本州北端における近世城下町の成立」(北海道・東北史研究会編『海峽をつなぐ日本史』三省堂、一九九三年)。

(18) 「津軽一統志」巻第一「為信公被為入大浦御館^附為則公逝去之事」

(19) 弘前市立弘前図書館蔵岩見文庫。

(20) 「津軽一統志」巻第一「為則公御相統^附南部援兵之事」

(21) 同右。

(22) 「津軽一統志」巻第四「外浜平均奥瀬油川之城開落^附円明寺来由之事」

(23) 『新青森市史』資料編2古代・中世(青森市、二〇〇五年、六五八ページ)。

(24) 同右、六四六ページ。

(25) (18)におなじ。

(26) (19)におなじ。

(27) 「系胤譜考 撰待氏」(前掲『新青森市史』資料編2古代・中世、中世編第1部一九九号文書)。

なお、小稿では、『新青森市史』資料編2古代・中世に掲載史料の一部を「(中略)」という形で省略した。

(28) 『寛政重修諸家譜』第七二五。

(29) (19)におなじ。

(30) 「津軽一統志」巻第一「光信公御治世^附種里御遺葬之事」

(31) 「津軽一統志」巻第一「盛信公御相統之事」

(32) 国文学研究資料館蔵「由緒書抜上」小笠原金次郎。

(33) (18)におなじ。

(34) 弘前市立弘前図書館蔵「東日流記」。

(35) 入間田宣夫「糠部・閉伊・夷が島の海民集団と諸大名」(入間田宣夫

ほか編『北の内海世界―北奥羽・蝦夷ヶ島と地域諸集団』、山川出版社、一九九九年。

後の松前氏の始祖といわれる武田信広の「従士」として、田名部糠部から信広とともに夷島に渡った者のなかにも「鬼袋某」という人物がいる。戦国期の北奥・夷島においては、こうした土豪層を鳩合していくことが、その勢力拡大に関わって重要な意味をもっていたようである。そのことは、為信にしても信広にしても、少なからず彼ら自身がアウトサイダー的要素を抱える存在であったからではなかったか。

なお、永正二年と翌三年の棟札は、『新編弘前市史』資料編1(古代・中世)(弘前市市長公室企画課、一九九五年)の八七九・八八〇号文書として掲載されている。

(36) 『津軽藩旧記伝類』(青森県文化財保護協会編、『みちのく双書』第五集、一九五八年)によれば、葛西頼清と信清とは親子であるという記述もみえる。ただ、この記述は頼清が大光寺城の城主という設定になっている。前掲『新青森市史』資料編2古代・中世によれば、葛西頼清を大光寺城主とするのは間違いであるという(四三二ページ)。したがって、この記述の評価は慎重にならざるを得ないが、少なくとも、おなじ一族であったものと考えたい。

(37) (34)におなじ。

(38) 「津軽一統志」巻第七「神君御父子美濃路御進発大守為信公御出陣并松野か事」

(39) 「津軽一統志」巻第七「於南部堀越」尾崎・板垣・三目内逆心并金小三郎智勇之事」

(40) 同右。

(41) 「津軽一統志」巻第七「大守為信公御下向尾崎等の逆臣御誅罰」

(42) (39)におなじ。

(43) 「津軽一統志」巻第七「平蔵君を奇託松野事」

(44) 「津軽一統志」巻第六「浅瀬石大和守父子御誅罰之記」

なお、「封内事実秘苑」では、これを慶長元年とする。小稿では、『新編弘前市史』資料編2(近世編1)や『青森県史』資料編近世1が採用する「津軽一統志」のそれに従った。

(45) 「津軽一統志」巻第三「千徳・小笠原縁組和州父子参加御味方之事」

(46) 弘前市立弘前図書館蔵一般郷土資料「封内事実苑 一 為信公」慶長元年二月条。

(47) 同右。

(48) (43)におなじ。

(49) 「津軽一統志」巻第六「九戸政実討死之記」九戸・松野・大隅家之事」

(50) (15)におなじ。

(51) (10)におなじ。

なお、南部光信に従って種里へやってきた者のなかに、久慈郡の「金備中守某」という者がいるが、彼との関係は不明である。

(52) (39)におなじ。

(53) (39)におなじ。

(54) 国文学研究資料館蔵「由緒書抜上」兼平章二。

(55) 前掲『新青森市史』資料編2古代・中世、中世編第1部三二三号文書。

(56) 弘前大学国史研究会編著『津軽史辞典』、名著出版、一九七七年。

(57) (4)におなじ。

(58) 『新編弘前市史』通史編1(古代・中世)(弘前市企画部企画課、二〇〇三年)。

(59) (4)におなじ。

(くどう・だいすけ 青森市史編さん室非常勤嘱託員)

表 瑞祥院様御代御奉公申上謹功御座候面々之子孫

No.	人物	摘記	領知	一統志
1	別浦太郎左衛門	石川城攻めでは後陣御供	目野野沢	
2	大湯四郎左衛門	御取合の際に懇意にする		○
3	立山専助	近習として奉公		
4	森岡金吾	当家三老のひとり 石川城攻めでは二番手の御供		○
5	小山内越前守	石川城攻めでは戦功あるという 信州様大浦入部に御供		○
6	成田市助	石川城攻めでは旗本の御供		○
7	中畑刑部	石川城攻めでは旗本の御供	大浦城に知行	○
8	寺田讃岐	南部鹿角から罷越 大間越関所番		○
9	八木橋左衛門四郎	大光寺の合戦の際籠田で討死		○
10	別府弥四郎	為信のところに罷越	沖館村？	
11	笹森左衛門次郎	本所は津軽笹森館		
12	小鹿彦次郎	為信の代に召し出される 野内番所	野内？	
13	棟方弥三郎	本国筑前本所宗像		○
14	今勘解由左衛門	大垣攻めの御供 金勘解由左衛門のことカ		△
15	白鳥伊右衛門	堀越城代 尾崎喜蔵らの反乱の際に討死		○
16	田中太郎五郎	甲州南部から下る		○
17	三上近江	本国近江加茂郡観音寺 石川城攻めでは旗本の御供 黒土近江のことカ		△
18	小山内越前守	御近習 石川城攻めでは旗本の御供		○
19	兼平中書	先祖津軽伊豆守は光信2男 三家老のひとり	兼平・荒川・牛館	○
20	奈良新五郎	御歩行 大垣攻めの御供		
21	桜田宇兵衛	石川城攻めでは旗本の御供	大浦城下に知行	○
22	葛西八郎右衛門			
23	山内筑前	大光寺合戦の際に乳井へ出陣		○
24	築館左衛門次郎	浅瀬石城攻めの御供	光信の代に先祖が原別・浪館に知行	
25	葛西本右衛門	茶臼館の戦いで味方に加わる		○
26	工藤宗左衛門	石川城攻めに御供		
27	藤田掃部助	大垣攻めに御供		
28	岩淵彦左衛門	石川城攻めで討死		
29	神衛門	衛門の子は尾崎喜蔵らの反乱の際に討死	中畑村？	
30	小山内主膳	先祖は鹿角で光信に奉公 永禄11年に相続	金山村？	○
31	外崎万助	石川城攻めでは旗本勢に御供		○
32	木村与助	小屋敷村で為信の宿を勤めた 鱒ヶ沢赫土御蔵奉行		○
33	神丹波	石川城攻めでは旗本の御供		○
34	一町田靱負	石川城攻めでは旗本	一町田全城	○
35	成田太郎左衛門	田舎館城落城の際に館守	撫牛村？	
36	斎藤掃部助	越後からやって来て奉公 大光寺・浪岡・黒石に出陣	中村	
37	斎藤掃部嫡子勘助			○
38	菊池刑部	西浜岩崎村関所番		○
39	豊嶋修理介	羽州豊嶋郡より引越		○
40	成田茂右衛門	越後浪人 和徳城攻めで討死		
41	津嶋弥右衛門	為則のころから奉公		
42	蒔苗弥三郎	石川城攻めの際に旗本の御供	蒔苗村？	○
43	奈良岡中務	信濃守のころから奉公 堀越城へ河井と申者夜懸の際に討死		○
44	鼻和彦五郎	麿杭野の陣で感状		
45	溝城刑部正	為則のころから奉公 六羽川で討死		
46	小笠原惣左衛門	尾崎喜蔵らの反乱の際に30石下される 田舎館城攻めの際の小笠原惣右衛門カ		△
47	岩河八十郎	大垣攻めに御供		
48	倉光主水	石川城攻めの際に旗本の御供 蔵光主水のことカ		△

49	相馬孫次郎			○
50	佐藤三郎右衛門	大垣攻めに御供		○
51	神助五郎	南部毛間内での戦に御供		○
52	黒瀧弥四郎			
53	高屋右近	先祖大曲右近は信濃守大浦入部に御供 右近は奉行役を勤める		○
54	小笠原伊勢	生国信州伊勢 天正年中為則へ出仕	御国御一統後乳井に知行、その後 居土村へ	○
55	七戸修理	小湊御境目番		○
56	桜庭孫八	外浜横内十人衆 九戸の陣に出陣		○
57	煤田八郎左衛門	尾崎喜蔵の反乱で討死		
58	櫛引助四郎	石川城攻めには兄弟で御供		
59	館山彦四郎	大光寺城落城後、残党を捕縛	館田村200石の菟地	
60	沼田面松斎	上州沼田郡から武者修行で廻国 石川城攻めでは旗本の御供		○
61	櫛引源左衛門	横内城で南部の押さえ 九戸の乱に参陣		
62	高杉村衛門	高杉村の開発により肝煎役 大垣攻めに御供し討死		
63	津嶋衛門太郎	金木の町立を申し出る		
64	岩庭惣助			○
65	小友弥右衛門		小友村	
66	九戸城主伊予子	九戸落城の際に子を預かる		
67	宮地村弥十郎			
68	乳井大隅守	大光寺攻めの際に先手をつとめる		○
69	宮川小四郎	吉町弥右衛門を討つ		○
70	東海吉兵衛	生国伊賀 大垣攻めの際に召し抱えられる	賀田村	○
71	阿保中務	大光寺城攻めで討死		○
72	半田与五郎左衛門	三戸で隠使		
73	今孫右衛門	忍び御用で九戸へ 九戸落城後帰国		
74	嶋村近江守	小田原落城後名を改め罷越 文禄2年召抱		
75	成田左衛門次郎	大垣攻めに御供し手柄	大坊村→紙漉沢	
76	菟中雅楽之助	茶臼館の戦いに参加 菟中神楽忠光カ		○
77	海老名惣右衛門	甲州浪人で天正年中に罷越 大垣攻めでは上方への使者をつとめる		
78	工藤助三郎		赤石沢中村？→中村沢目片屋敷村 和徳村	
79	三上豊後	天正11年苗字小館名信実		
80	佐藤平兵衛	檜山勢の襲来を堀越へ上申		○
81	宮館対馬	先祖小山内近江 石川城攻めでは旗本の御供か	宮館村	
82	服部長門	大垣攻めの後に取り立て		○
83	瀧本小次郎	浅瀬石城攻めに兄弟で御供	独狐村30石	
84	斎藤太次右衛門	新岡但馬寄子		
85	石鳥屋与七	石川城攻めに御供	薬師堂村・土堂村に30石	
86	斎藤弥兵衛	田舎館城攻の案内		
87	成田与次右衛門			
88	三浦但馬	浪岡城攻めの際に城内のようすを案内		
89	対馬掃部助	大垣攻めで手柄	白銀村に30石→後湯村も	
90	一戸弥右衛門	尾崎喜蔵らの反乱で活躍		
91	大沢五郎三郎	種里へ出仕 大垣攻めに御供		
92	船水讃岐	船水が津軽の領分になって家来に		
93	二本柳三郎右衛門	浪岡に居住 油川城攻略の際に手だてを講じる		
94	鼻和彦五郎			
95	相馬助六			
96	鎌田左九郎	浪岡・油川出馬の際に御供		
97	杉沢権六郎	浪岡攻めの際城内へ忍び込む		
98	藤原大隅守	油川派立御用を仰せつけられる		
99	田舎館七右衛門			
100	手塚源八	天正年中南部大膳太夫に鉄炮術で召抱 九戸の乱の後津軽へ召抱		
101	念西坊頼英	油川攻略の際に味方に		○

大学共同利用機関法人人間文化研究機関国文学研究資料館蔵津軽家文書「由緒書抜」上から作成